

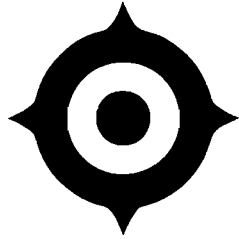
日本銀行北九州支店の生い立ち

● 当地ゆかりのお札を通してみる北九州小史 ●



日本銀行門司支店
(昭和14年当時の観光絵葉書より)

日本銀行北九州支店



日本銀行の行章

皆さんが普段使用しているお札（日本銀行券）にも印刷されている日本銀行の行章（上記デザイン【いわゆる「メダママーク」】）は、「日」という漢字の古代書体の一種です。

なぜ、「メダマ」が行章として用いられるようになったかははっきりしませんが、1882年（明治15年）の開業に備え準備された多くの調度品、印刷物にはこのマークが刷り込まれており、この段階ですでに正式の行章として採用されていたとみられます。

また、1885年（明治18年）に発行された最初の日本銀行券には、総裁印の中央にこの行章がデザインされていました。



咆哮の獅子像

日本銀行の本店旧館の正面玄関入口上部には、咆哮する2頭の雄ライオンが6個の千両箱を踏まえて後足で立ち、日本銀行の行章である「メダママーク」を抱えた紋章があります。

日本銀行とライオンとの関係ははっきりしていませんが、欧米を視察した建築家の辰野金吾博士（日本銀行本店旧館、東京駅の設計者で有名）が、欧州には宮殿・寺院などに王者のシンボルである“獅子”をあしらった紋章飾りが多く使われていることを知り、これを探り入れたものであろうと言われています。

また、旧館のほかにも、昭和初期に作られた東門扉、南門アーチにも同じようなデザインの装飾が施されています。

表紙の写真は、昭和14年当時の観光絵葉書。当時の日本銀行門司支店付近の様子を知る貴重な一枚。門司支店の位置には、現在門司文化センターが建っている。

もともと関門海峡一帯は、軍事上の要衝の地であったため、砲台が構築されるなど軍事要塞化されていた。このため、当時門司港での自由な写真撮影は、許されなかった。この絵葉書にも、左上に「昭和14年2月18日下関要塞司令部許可済」との記載があり、当時の空気を今に伝えている。

なお、英語の「THE PRSPERITY…」は、PROSPERITYかと思われる。また、日本銀行の英文呼称は、現在「BANK OF JAPAN」が用いられている。

北九州支店の沿革

▽西部支店開設～初代支店長に高橋是清～

北九州支店の前身である西部支店は、明治26年10月1日(1893年)、大阪支店に次ぐ日銀2番目の支店として設置された。初代支店長は高橋是清、その業務地域は、中国、九州両地方にまたがる広範囲なものであった。

西部支店は、九州地方の金融の利便を図り産業振興を図るために、川田総裁(第3代日銀総裁)自らが視察して、将来西日本の経済拠点になると判断された門司港に店舗を開設することとした。ただ、当時の門司(福岡県企救郡文字ヶ関村)は、九州鉄道株式会社、門司築港会社が設立されるなど、躍進の気運に包まれていたが、まだ町並みも揃わぬ新開地であった。

一方、対岸の山口県赤間ヶ関市(現在の下関市)は、古くから栄えてきた商港であったため、西部支店はとりあえず赤間ヶ関市に仮店舗を設け、門司に新市街が出来上がるのを待って、新築移転することに決まった。

西部支店長時代の
高橋是清



(42歳当時)

赤間ヶ関(馬関)では、仮店舗として、当時経営不振に陥っていた第一百十国立銀行の本店建物を購入した。しかし、購入した店舗は、もともと船問屋が建てたものであり、銀行店舗とするには甚だ不都合な構造であった。

そこで、高橋是清は、明治26年9月23日着任と同時に、10月1日の開業を目指し、突貫工事による内部改装を命じ、支店長以下14名全員昼夜兼行で開業準備に当たった。

因みに、高橋是清の西部支店長任命前の役職は、日本銀行本店建設所主任であった。

▽門司に新店舗完成

明治31年10月（1898年）には、2年3か月の歳月と、15万円余りの費用をかけた店舗が完成した。本館は、明治の名建築家辰野金吾博士らによる設計であり、半球のドーム型屋根と側壁を花崗岩で飾った本格的なレンガ建築で、スレートぶきの屋根が朝日に映える威容は、当時の人々の目をみはらせたものらしい。

西部支店全景



西部支店手前の橋は鎮西橋。なお、川は昭和初期に埋め立てられ、現在では欄干の一部とバス停の名前に橋の名残りを留めるのみとなっている。



鎮西橋欄干跡

～店舗完成当時の「門司新報」の報道より～

西部支店の店舗が完成した際、地元新聞の「門司新報」は、「・・・建物は本館191坪のほか金庫等を合すれば286坪を占め、従事した職工人夫の数は延べ47千人にも達す。花崗岩は山口県徳山産を用い、彫刻と屋根工事には京都および東京からそれぞれ職人を招いた・・・」と、図入りの付録ページを編集して読者に紹介している。

▽門司支店時代～金融恐慌そして戦災～

大正6年（1917年）8月、熊本支店が設置されると、西部支店は「門司支店」と改称された。この門司支店時代は、第1次、第2次両世界大戦にまたがり、その歴史は波乱に富んでいる。

因みに、門司支店改称の翌大正7年9月、初代西部支店長を勤めた高橋是清は、原敬内閣のもと大蔵大臣に就任、大正10年11月（原首相は東京駅で刺殺）には総理大臣（兼大蔵大臣）となっている（在任期間：大正10年11月～同11年6月）。

◇金融恐慌 激しい預金取り付け

門司支店が直面した幾多の荒波、その中でも特に、大正から昭和初期にかけて発生した金融恐慌が筆頭に挙げられる。殊に昭和2年4月には、大半の銀行が取付けにあい、銀行の店頭には預金者が殺到した。このため、各行は、争って日銀門司支店に資金の融通を求め、一時は収拾のつかない状態に陥ったが、門司支店職員の不眠不休の対応により、危機的状态を乗り切った。

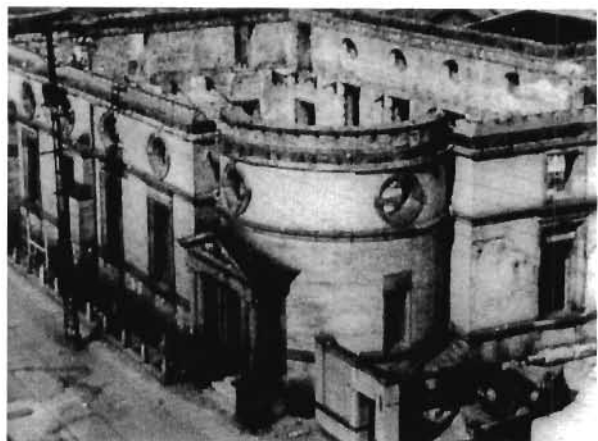
また、取付け騒ぎの特に激しかった銀行については、預金者の動揺を静めるため、日銀職員が、日銀の行章であるメダママークの入った法被を着て、現金入りの兌換箱を肩に担ぎ、列を作っている客の前をわざわざ通って窓口を積み上げたことなどもあった。

◇門司空襲 店舗焼失

今一つの荒波は、門司空襲による店舗焼失である。第2次世界大戦が苛烈化するに伴い、南方戦線への輸送基地であった門司は、鉄都八幡とともに、米軍の激しい空襲を受けることとなった。

特に昭和20年（1945年）6月29日の大空襲では、門司支店周辺を中心街が焼夷弾の投下により壊滅的な被害を受け、門司支店も金庫、公文庫を残して営業室（本館）を全焼した。

空襲で焼失した門司支店



このため翌日から、正金銀行(旧東京銀行の前身)支店に間借りし、1週間後には、焼失店舗と道路一つ隔てた真向いにある大分合同銀行門司支店(現大分銀行門司支店)を仮店舗として移転した。

しかし、仮店舗の金庫には、焼失を免れた旧店舗別棟の金庫を引き続き使用することとしたため、門司支店職員は、現金類の出し入れに際し、仮店舗と金庫との間を、毎日電車道を横断して搬送していた。

このような不便な仮住まいは、焼け跡に店舗が完成した昭和24年11月まで、4年5か月間続いた。

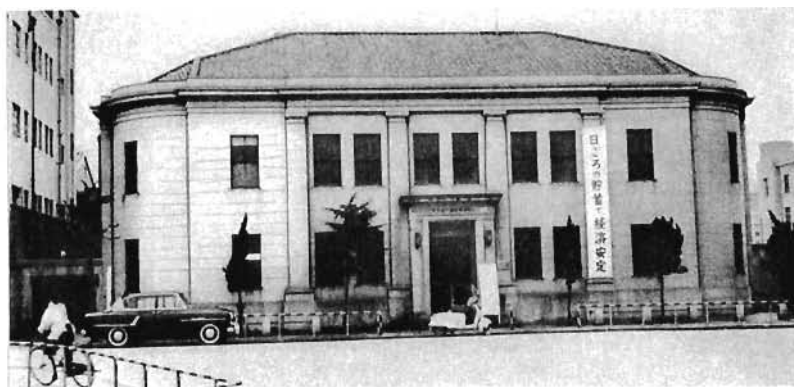


大分合同銀行門司支店内の仮店舗に現金を搬入する路上の日銀門司支店職員。

▽門司事務所の頃～門司大水害～

昭和23年(1948年)2月、大分支店が設置されたのに伴い、門司支店は、門司事務所に改組された。しかし、事務所とはいえ、わが国四大工業地帯の一つを形成する北九州5市の経済規模等を考慮して、事実上支店とほぼ同格の規模と権限を持つ異例の事務所として発足した。

門司事務所の外観



事務所時代の大きな事件としては、昭和28年（1953年）、北九州地方を襲った大水害がある。連日降りしきる豪雨は、総雨量600mm以上に達し、6月28日の日曜日、門司ではついに大規模な土石流（山津波と呼ばれている）が発生するなど、大きな被害をもたらした。

溢れ出る濁流は、門司事務所の営業所構内にも浸入し、金庫前廊下の浸水も15センチに達し、金庫も3センチ程度浸水した。このため金庫内には泥がたまり、銀行券も冠水したことから、後日、冠水した銀行券の掘り出し、乾燥等の事後処理の追われることとなったが、懸命な職員の活躍によって被害は最小限にとどめることができた。



門司事務所営業所の金庫前廊下

▽北九州支店の誕生～北九州市の発足と共に～

昭和38年2月、北九州5市合併による百万都市「北九州市」誕生を機に、門司事務所は再び「北九州支店」となり、支店復帰を願う地元市民、職員の念願が実現した。

昭和39年11月、門司から新生北九州市の金融、商業の中心地小倉区（現在の小倉北区紺屋町）に店舗を新築移転した。現店舗は小倉の繁華街から南東にわずかに離れ、北九州銀行協会のほか、銀行、保険、証券等の有力拠点が集まる金融街の一画にある。

北九州市の金融経済上の機能度をみると、西日本における手形交換高では、北九州手形交換所は、神戸、福岡、広島各交換所に次ぐ規模を誇っている。

また、金融機関の集積度でも、当地には、都市銀行、信託銀行、地方銀行等の多くが支店を開設していることから、当店の取引先金融機関数は36先に上り、九州・山口地方では、福岡支店に次ぐ第2位の規模となっている。

北九州・お金の歴史

皆様は、北九州に縁のあるお札や北九州生まれのお札があるのをご存知だろうか。それらのお札を見ると、北九州の歴史の一端を垣間見ることができ、実に興味深いものがある。そこで、ここでは、お札を通して見た北九州の歴史、伝承を紹介する。

▽北九州にゆかりのあるお札 ～北九州の金融小史～

日本銀行は、現在国内で流通する銀行券（お札）の唯一の発行銀行である。しかし、日本銀行が明治15年（1882年）に設立され、翌明治16年に唯一の発券銀行と定められるまでの間は、明治5年11月に制定された国立銀行条例に基づき各地に設立された国立銀行が銀行券を発行していた。国立銀行の設立は西南戦争終結後の明治10、11年頃に最も盛んになり、明治12年末（1879年）には、全国で153行、九州では17行を数えるまでになった。

北九州地方では、明治12年5月、大橋村（現行橋市）において第87国立銀行が設立・開業し、第87国立銀行券を発行していた（図録3参照）。国立銀行の設立形態としては、秩禄や金禄公債を元手にした士族資本中心で設立された士族型銀行が一般的であったが、この第87国立銀行は、士族、平民の出資比率が半々の国立銀行であった。この意味で、第87国立銀行の場合は、士族と商人がうまく連携した好例と言えよう。

同行の出資者の中には、初代頭取となる大橋村の有力商人柏木黙二（「柏屋」と呼ばれていた）がいた。この「柏屋」は江戸時代、小倉藩の許可を受け、「私人札」と呼ばれるお札を発行していた。また、大橋村に隣接する行事村（現行橋市）には、柏木家と縁戚関係にもあった豪商、「行事飴屋」（玉江家）が



明治中期の中津街道と玉江家
（写真：玉江彦太郎氏所蔵）

店を構えていた。「行事飴屋」は、飴売りから店を興し、綿実、酒、醤油などの事業多角化により業容を拡大し、江戸時代の全国豪商100傑のひとつに数えられるほど、繁栄を極めた商家で、藩政時代に多数の私人札を発行した（図録2参照）ほか、幕末期の小倉藩財政の大きな支えとなっていた。

江戸時代を通じて各地の大家では、「私人札」の発行を商人に許可する一方、領内で通用する「藩札」を盛んに発行している。小倉藩も早くから藩札を発行し、廃藩置県で小倉藩が解体される直前まで発行していた（図録1参照）。

なお、第87国立銀行の設立地が小倉ではなく現在の行橋市であった背景について簡単に触れておこう。

第2次長州征伐（1866年）に際し、幕府側にあった小倉藩は、長州藩との戦に敗れ、小倉城に自ら火を放ったうえ田川方面に退いた。その後、小倉藩は大橋に近い香春、更に豊津と藩庁を移転し、在郷の豪商の援助を受けて藩校を開設するなど、士族と商人の結びつきは一段と強まっていった。この結果、柏木家、玉江家といった豪商の本拠地であった大橋村・行事村のほうが、商業資本の充実している点で国立銀行の立地として有利と判断されたためであろうと推測される。

もう一つ、当地縁のお札を紹介する。このお札は、史実と伝承が合体して生まれた甲10円札（明治32年発行）で、登場するのは、和気清麻呂と猪である。

伝承によれば、景雲3年（769年）、和気清麻呂は、称徳天皇の勅使として、先に伝えられた宇佐八幡宮の神託（道鏡を皇位につける）を確認するため、宇佐八幡宮に参詣した。和気清麻呂は、そこで先の神託と異なる神託を賜り、これを天皇に奏上したところ、その内容に怒った道鏡は、清麻呂の足の筋を切って大隅国への流刑とした。

清麻呂は、大隅国へ流される途中、宇佐八幡宮の神託により、猪の背にまたがって足立山の麓、湯川（現在の小倉南区）へ行き、その地に湧き出る温泉で足を治したことで、再び立てるようになった、と伝えられている。

この伝説に因んで、小倉北区妙見神社（御祖神社）では、猪に乗った和気清麻呂像と、^{みおや}狛犬ならぬ狛猪をみることができる（図録4参照）。

和気清麻呂像



最後に、日本銀行西部支店初代支店長として当店に縁のある、高橋是清の肖像が印刷された紙幣である（図録5参照）。

高橋是清は、日銀総裁、総理大臣、大蔵大臣（5回）を歴任するなど、我が国金融経済政策の中心人物であった。

また、死（2・26事件）の直前に、波乱に富んだ前半生を語る自伝を出版し（昭和11年2月9日刊行）、その自伝は今でも多くの人々に読み継がれている。

晩年の高橋是清



小倉藩銀札

【図録 1】



小倉藩が発行した藩札（銀札）。この藩札の額面は銀10匁(37.5g)であり、引替所で額面の正貨（銀貨）と引き替えることが出来た。因みに徳川幕府が行った天保年間の調査によると、小倉藩が天保6年(1835年)に、流通期間を15年間と定めて発行した銀札の発行残高は、1,629貫130匁(1両=60匁として約27,152両、重量に換算すると約6トン)となっている。

私人札（行事飴屋）

【図録 2】



豊前行事村（現在の行橋市）の豪商「行事飴屋」（玉江家）が発行した私人札。

写真右の飴屋札は銀札で、重さ1匁の銀と引替えることが出来た。飴屋札は、3種類あり、額面には、10匁、5匁、1匁、5分、3分、1分があった。

飴屋札は、天保6年～安政2年(1835年～1855年)の20年間にわたって発行された。

第87国立銀行券
【図録3】

新5円券 (表)



(裏)



新1円券 (表)



(裏)



国立銀行とは、国立銀行条例（明治5年制定<1872年>、同12年改正<1879年>）によって設立された紙幣の発行を許されていた銀行である。第87国立銀行は、明治12年、大橋村（現在の行橋市）に本店を置き開業した。初代頭取は、大橋村の豪商「柏屋」当主柏木黙二であった。銀行券の表面には、柏木黙二の署名・捺印が印刷されている。

国立銀行券の様式は、明治10年（1877年）に制定されたもので、我が国初の純国産洋式紙幣であった。

国立銀行券は、紙幣が日本銀行券に統一されたのを受け、明治32年（1899年）末に通用停止となった。

甲10円券（兌換銀行券）
【図録4】

(表)



(裏)



明治32年（1899年）に発行された甲10円券は、日本人技師だけの手で作製、印刷された第1号の銀行券である。甲10円券は、金本位制への移行に伴い（明治30年）、銀貨兌換券（銀貨と交換可能な紙幣）である「改造十円券」を金貨兌換に変更する際に、偽造防止のため様式全体に改良を加えた銀行券である。

裏面に大きな「猪」が描かれていることから、一般に「いのしし」の愛称で呼ばれていた（なお、当地出身でお札の肖像となったのは、今のところ足立山の「いのしし」君が唯一）。

表の肖像は、和気清麻呂像、神社は、和気清麻呂を祭る護王神社（京都市上京区）である。因みに護王神社でも、妙見神社と同じように狛犬の代わりに猪が安置されている。

高橋是清の肖像（B 50円券）

【図録5】

（表）



（裏）



昭和26年12月(1951年)より発行されたB50円券。

朝鮮戦争下の当時、近い将来、物価水準が昭和20年(1945年)時点に比べ約100倍になり、先行き50円額面通貨の必要性が高まるとの予測から、急遽50円券の発行が決まった。

新様式銀行券(B券)の肖像は、原案(昭和21年12月当時)では、岩倉具視が50円券で、100円券に高橋是清を採用する予定であったが、昭和26年、GHQへの発行許可申請直前に岩倉具視から高橋是清に変更された。

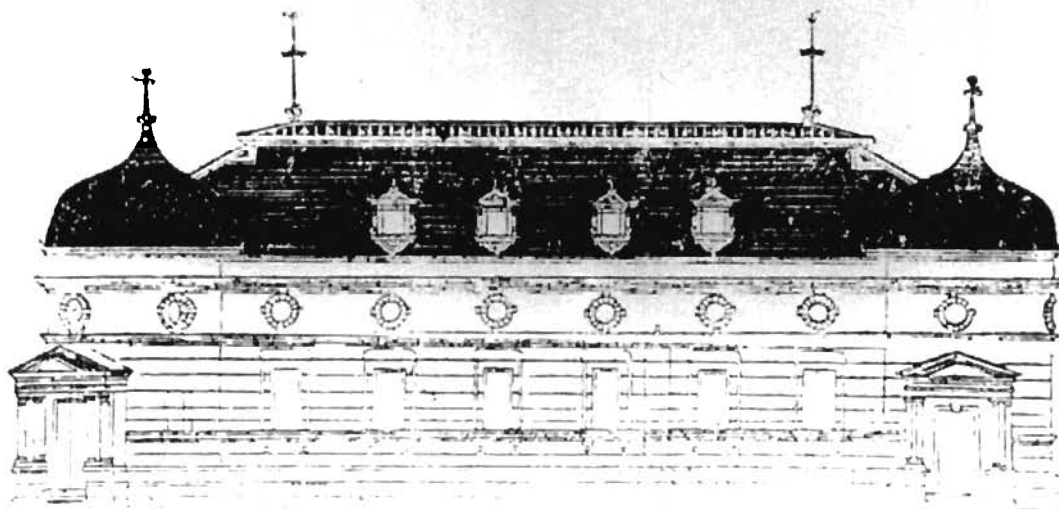
高橋是清は、日本銀行西部支店(現北九州支店)初代支店長、第7代日本銀行総裁も勤め、その後、大蔵大臣、首相を歴任した。

高橋是清は、首相経験後にも幾度か蔵相を勤めているが、その最初の時期は、昭和の金融恐慌の真っ只中で、これを蔵相在任期間42日(昭和2年4月20日～同年5月30日)という短期間のうちに沈静化させた高橋是清の手腕は、現代の世においても、高く評価されている。高橋是清は、昭和11年2月(1936年)、公債漸減方針のもと軍事予算の増額を求める軍部と対立した結果、2.26事件により途半ばにして帰らぬ人となった。

参考図録

西部支店の正面図

圖之面正館本店支部西行銀本日



西部支店の側面



ドーム型屋根の本館とは別棟になっていた金庫、公文庫（写真では左側低層部）は、幸運にも昭和20年6月の空襲時にも焼失を免れた。空襲当時公文庫に保管されていた明治26年開業以来の帳簿など貴重な文書は、現在の北九州支店に引き継がれている。また、日銀の行章であるメダママークの入った金庫・公文庫屋根瓦の一部も、西部支店の数少ない遺物の一つとして北九州支店に保存されている。

西部支店営業所内部客溜りの様子



西部支店門司移転を祝う歓迎園遊会開催を伝える門司新報特別広告
(明治31年11月2日付)

日二月一十年一十三第報新

特別廣告

來ル十一月三日 天長節
拜賀式ヲ舉行シ畢テ日本
銀行西部支店歡迎ノタメ
清瀧速門樓ニ於テ園遊會
ヲ催サントス御同意ノ御
方ハ來ル三十日迄門司役
場内歡迎事務所委員ニ其
旨御通報被下度候

但シ當日正午十二時開園會費一入金堂園當日特
別引換ノ事

明治卅一年十月日

委員長 後藤 章臣
副委員長 茶藤 橋

委員 (イロハ順)
北邊 善時 夫伏 彌五郎 長谷川 專太郎
高生 政久 甲藤 求己 吉廣 徳次郎
津川 幾弘 武原 三郎 武内 力五郎
中村 喜之助 鴉野 武次郎 山本 英忠
松尾 敏章 松本 健次郎 松田 英太郎
右野 常雄 淺海 正義 森田 英太郎
相良 保太郎 平瀨 常次郎 守永 久吉
毛里 猛三 森原 惟三 隅守 廣吉
杉原 惟三

發起委員
松田 達治 前田 益春
夫伏 彌五郎 長谷川 專太郎
西川 勝太郎 大橋 徳次郎
甲藤 求己 吉廣 徳次郎
武原 三郎 武内 力五郎
鴉野 武次郎 山本 英忠
松本 健次郎 松田 英太郎
淺海 正義 森田 英太郎
平瀨 常次郎 守永 久吉
門司 常助 隅守 廣吉

西部支店の赤間ヶ関（仮店舗）から門司への移転は、西部支店開設当初から予定されていたことであったが、移転に際しての門司市民の歓迎ぶりの一端が窺える資料。

日本銀行門司支店跡記念碑



記念碑文

日本銀行門司支店跡

明治31年10月

大阪以西初の支店として対岸の赤間ヶ関（現在の下関）に仮設してあった日本銀行西部支店をこの地に新築開設。

大正6年8月門司支店と改称

西部支店の初代支店長は

後の総理大臣 高橋是清

爾来星霜60有余年

昭和39年11月

北九州支店の小倉開設に至るまでこの地が当地金融界における指導的中心地であった。北九州市によりこの地に門司文化センターが開設される時にあたり往事を記録し記念とする。

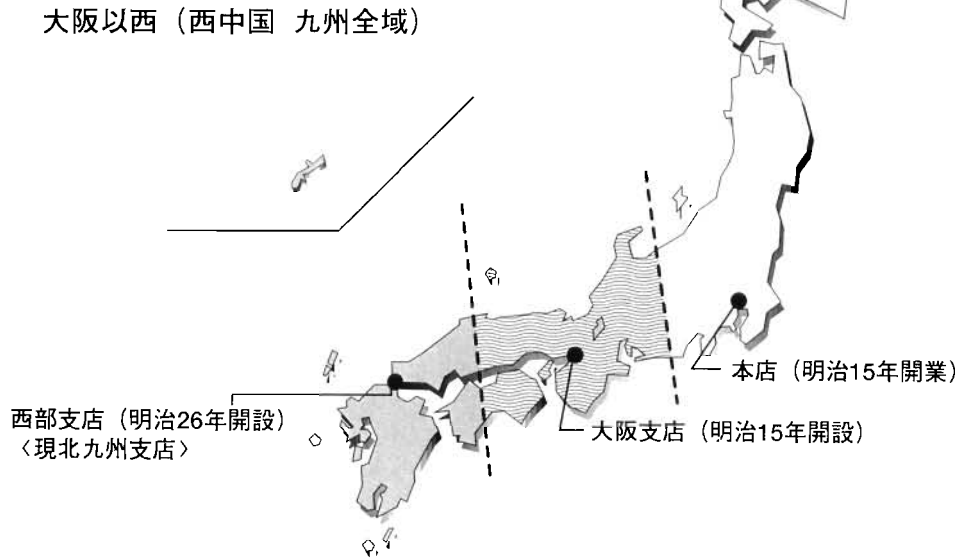
昭和56年4月

日本銀行総裁 前川春雄

北九州支店の業務区域

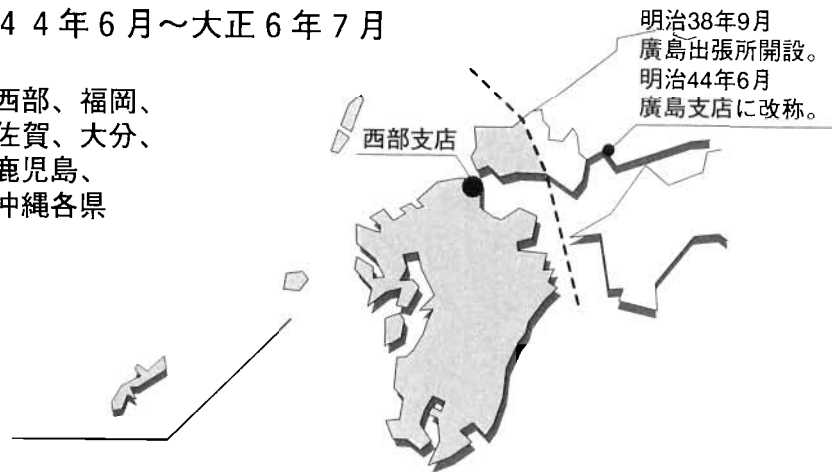
明治26年開業以来、中国・九州地方に相次いで日本銀行の支店が開設されてきたため、当店は、5度にわたって業務区域の見直しが行われ、現在では、福岡県東部（北九州市、行橋市、豊前市、京都郡、築上郡）が業務区域となっている。

【第1期】明治26年10月～明治44年5月

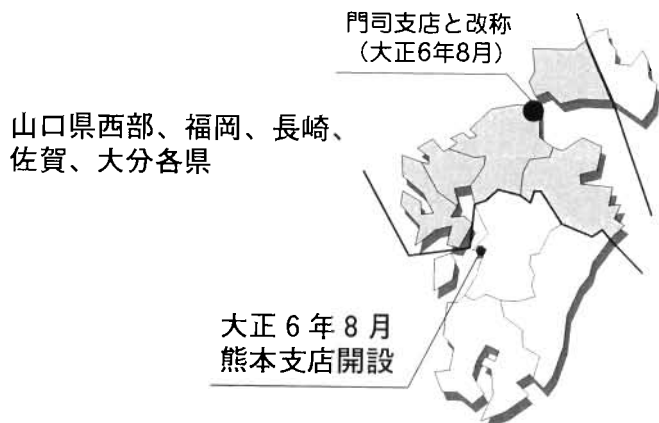


【第2期】明治44年6月～大正6年7月

山口県西部、福岡、
長崎、佐賀、大分、
熊本、鹿児島、
宮崎、沖縄各県




【第3期】大正6年8月～昭和16年11月



日本銀行北九州支店略年表


年月	北九州支店	主要事項
明治		15. 日本銀行条例公布、開業 ♪ 大阪支店開設 18. 兌換銀行券発行開始 21. 門司に九州鉄道会社設立 22. 門司港特別輸出港に指定
26.10	西部支店開設 (初代支店長に 高橋是清 就任。仮設店舗を旧第一百十国立銀行本店<赤間関市>に設置)	27. 日清戦争勃発
31.10	店舗落成 (門司町へ移転) 本邦西部地方 (西中国、九州全域)	29. 日本銀行本店本館落成 30. 官営八幡製鉄所建設
38.9	(廣島出張所開設) <44.6 廣島支店と改称> 山口県西部、福岡、長崎、佐賀、大分、熊本、鹿児島、宮崎、沖縄各県	32. 門司市制施行 34. 関門連絡船就航 ♪ 八幡製鉄所開業 37. 日露戦争勃発
大正		44. 高橋是清 第七代日銀総裁に就任
6.8	門司支店と改称 (熊本支店開設) 山口県西部、福岡、長崎、佐賀、大分各県	2. 高橋是清 蔵相に就任 3. 第一次世界大戦に参加 9. 経済恐慌勃発 10. 高橋是清 内閣成立 12. 関東大震災
昭和		2. 金融恐慌勃発 6. 満州事変勃発
16.12	(福岡支店開設) 山口県西部、大分県、福岡県のうち遠賀川以東 <但し、筑豊地区の石炭調査は業務区域にかかわらず引続き本店が担当>	11. 2・26事件 (高橋蔵相 ほか殺害) 12. 日華事変勃発 16. 太平洋戦争勃発 17. 日本銀行法公布 ♪ 関門トンネル (鉄道) 開通

年月	北九州支店	主要事項
20.6	門司大空襲により店舗焼失 (大分合同銀行門司支店へ仮移転)	20. 太平洋戦争終結
22.12	(下関支店開設)	21. 新円切替
	大分県、福岡県のうち遠賀川以東	✕ 新憲法公布
23.2	門司事務所と改称 (業務、発券、文書の3係に縮小) (大分支店開設)	
	福岡県のうち、門司、小倉、戸畑、八幡、 若松各市と企救、京都、築上各郡	24. 為替レート設定1ドル=360円
24.11	新店舗落成	✕ 日本銀行政策委員会設置
		25. 朝鮮動乱勃発
		33. 関門トンネル(人道、車道) 開通
		37. 若戸大橋開通
38.2	北九州支店と改称	38. 北九州市発足(門司、小倉、
	福岡県のうち北九州、行橋、豊前各市と京都、 築上両郡	戸畑、八幡、若松5市合併により
39.10	現店舗落成	神以西初の百万都市誕生<旧5市
✕ 11	営業開始(小倉区へ移転)	は各々区へ変更>)
		48. 第一次石油危機
		✕ 関門橋開通、北九州道路全通
		49. 北九州市7区制実施(小倉区を
		南北に、八幡区を東西に分割)
		50. 山陽新幹線博多まで開通
		55. 北九州都市高速道路開通
		57. 日本銀行創立100周年
		60. 北九州モルレル小倉線開業
		63. 北九州市「ルネッサンス構想」策定
平成		2. スペースワールド開業
5.10	支店開設100周年	6. 新北九州空港着工(完成17年)
9.6	支店ホームページ開設	10. 新小倉駅ビル開業
10.10	支店開設35周年 店内資料展示室開設	✕ 改正日本銀行法施行



〈参考文献〉

- | | |
|------------|----------------------------|
| 「高橋是清自伝」 | 高橋是清著 |
| 「明治時代の行橋」 | 玉江彦太郎著 |
| 「行事館屋盛衰私史」 | 玉江彦太郎著 |
| 「北九州の歴史」 | 小田富士雄 有川宜博
米津三郎 神崎義夫 共著 |
| 「日本銀行 百年史」 | |
| 「日本金融年表」 | 日本銀行金融研究所 |
| 「図録 日本の貨幣」 | 東洋経済新報社 |
| 「貨幣博物館」 | 日本銀行金融研究所 |
| 「日本の貨幣」 | (財)大蔵財務協会監修、フクニチ新聞社発行 |



平成13年4月現在